

Title	リヤサノフスキイ著『スラヴ派の教説に現れたロシアと西歐』
Sub Title	N. Riasanovsky : Russia and the West in the teaching of the Slavophiles
Author	中澤, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1954
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.27, No.10 (1954. 10) ,p.82- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19541015-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法付則により除かれている(民法八五八條三項。本條改正については、『民』稿『民事法ノイ』法學研究二三卷九號參照)。これらは、おそらく單純なケアレヌ・ミス・テイクによるものであろうが、讀者をして不測の誤りに陥らしめる恐れがないでもない。再版の際には是非改めて頂くことを望むしだいである。(評論社發行、B6版二〇九頁、價二二〇圓)

(田中 實)

N. Riasanovsky :

Russia and the West in the Teaching of the Slavophiles

1952, Harvard University Press.

リヤサノフスキイ著

『スラヴ派の教説に現れたロシアと西歐』

最近、ロシアの政治思想乃至社會思想の研究を意圖した二・三の新刊書を入手した。例えば、R. Hare の *Pioneers of Russian Social Thought*, 1951, Oxford University Press 及び S. Tompkins の *The Russian Mind*, 1953, University of Oklahoma Press などがそれである。改めて述べるまでもなからうが、一九世紀ロシアの政治状況は、社會時評はともかく文學的創作・文藝批評・哲學的思想すらもがすぐれた政治的發言であることに存在理由を見出してはいた程に、又實際をうした知的活動こそが僅かに許

された合法的な政治的實踐であつた程に、強い變革的な性格を帯びていたのである。それ故にか、内容の多様さ複雑さにおいても極めて特異な一九世紀のロシア政治思想は數多くの思想史家の研究對象となつてきた。今後ますますこうした傾向の衰えることはあるまい。しかもソ連邦において例えばチエルニシェフスキイ、ラヂシチェフなどの著作集等が相次いで刊行され、その結果この種の研究に伴う資料的な障碍も次第に除去されようとしている現在、諸外國における新しい研究書の紹介が何かの參考にもなればと考へて、ここにリヤサノフスキイ著「スラヴ派の教説に現れたロシアと西歐」を取上げてみた。

本書は六章二三頁からなる本論及び appendix—Khomiakov's History and Friedrich Schlegel's Philosophy of History—と bibliography とから構成されている。次ぎにその敘述内容を素描してみよう。

一 西歐から受けた思想的影響を無視するとロシアの政治思想乃至社會思想の發展を正しく理解することは不可能となるが、スラヴ派自身が「ロシアと西歐との思想的關係と云ふこの面倒な問題」について既に解答しているので、本書が研究主題とする「スラヴ派のイデオロギー」の本質は、何によりもその解答を中心的な問題として考察することにより正しく追及され把握され得るのではあるまいかと、著者は問題點の所在をまず明らかにしている。しかし一般に西歐派と對置させてスラヴ派と呼ばれた一九世紀ロシアの一つの思想的系譜——「スラヴ派のイデオロギー」そのものの究明は第二章

以下に譲られ、第一章ではスラヴ派生成の精神的風土に關する緒論的説明がなされている。すなわち彼リヤサノフスキイによると、スラヴ主義は、一九世紀初頭の盲目的排外的な又は官製的なあるいは考古學的・言語學的な民族主義的思潮とカラムジンの史觀により覺醒された歴史的感覺とから成る培養基の上に生誕し、ドイツ理想主義哲學により方向づけられて生長したと云う。ではかく生成したスラヴ派の構成員を著者はどのような思想家に限定しているか。

二 まず、リヤサノフスキイはスラヴ派の黄金時代を一八四五年から一八六〇年の間に求め、スラヴ派を「宗教・哲學及びロシヤと西歐との關係と云つた基本的な諸問題についての意見・態度乃至期待を共通とする知識階級の一部である」と見る。勿論この「知識階級の一部」はより具體的に明示される。すなわち彼は、Aleksai Khomiakov・Ivan Kireevskii・Petr Kireevskii・Konstantin Aksakov・Ivan Aksakov と Iriri Samarin をスラヴ派と呼び、さらに彼等の略歴を記している。従つて著者の意味するスラヴ派とは所謂古典的スラヴ派に限定されたことなる。かくスラヴ派とスラヴ派のエビゴネンとを峻別して、著者はスラヴ派の一般的な特徴——例えば彼等がいずれも地主であり當時における最高の知識人であつて、官途・公職への就任を潔しとしなかつたこと又相互に血縁・姻戚又は交友關係を結んでいることなどを指摘し、スラヴ派の人間像を畫き出しつつ主題的な研究へと目を移して行く。

三 それではスラヴ主義の本質はどのように把握されているか。スラヴ主義と云う一つの思想的系譜の存在を否定する Zenkovskii の意見、スラヴ主義は「論理的統一體」であると見做す一般的な見

解、あるいは「ロシヤ乃至ギリシヤ正教の又は同時にそれら兩者の生きた表象である」とする Berdiaev などの諸説を否定する著者は、スラヴ派が相互關係のある諸問題を同様の態度で討議した事實、別言すると彼等の問題意識・問題への接近の仕方が基本的に同一であつた事實に注目しなければならぬと云う。そしてこれらの諸事實から彼は、スラヴ派のイデオロギーは二つの相對立する基軸を中心に形成された、云い換えれば二つの部分からスラヴ主義と云う全體が組成されているのだと考える。同時に又彼は、これら二つの基軸乃至部分の一方はロシヤ——自己を、他方は西歐——他者を意味するものである故、それぞれの表現に《我々》と《彼等》と云う二つの用語を使用することが最も適切であろうことを説く。勿論《我々》とはロシヤを《彼等》とは西歐を指すわけであるが、スラヴ派のイデオロギーをかく dichotomize し得る論證としてスラヴ派の心理的側面・歴史觀・政治論等の分析がなされている。

四 さて第三章の考察から引出される當然の結果として第四章では、スラヴ派のイデオロギー解明が、スラヴ派は《彼等》と《我々》をいかに理解したかを検討することによつて大きく押し進められることとなつた。まず著者はイギリス・フランス・ドイツあるいはユダヤ人などの具體的な問題に關するスラヴ派の見解を整理して、スラヴ派が《彼等》の屬性として利己主義・尊大・淺薄・冷酷・奢侈・貪欲などを數上げていることを知る。又、彼は、《彼等》の心的原理は邪惡な合理主義・論理主義であつて、《彼等》の歴史も Kushiitism に根源するこの心的原理の論理的發展でしかないとするスラヴ派の認識と、「唯一の原理である合理主義が、一たび破綻すると

西歐に残されるただ一つの可能な方向は崩壊と死以外にない」と見るスラヴ派の一致した結論を發見している。さらに彼はスラヴ主義の《我々》に關する領域に目を轉じ、ロシア人・ギリシヤ正教教會・家族あるいは法と正義・教育などの問題點を設定してスラヴ派の教説を整理し《我々》の新鮮さ・力強さを稱えその未來を明るく肯定し《彼等》の未來を否定するスラヴ主義の面目の描寫に成功している。すなわち《我々》こそが眞のキリスト教徒であつて教會と家庭と共同體のつつましやかな生活には身分的・階級的對立は存在しない、況んや《彼等》に見られるような革命と專制・強制と無秩序・屈從と鬭争と云つた分裂状態のあろう筈はないと考えるスラヴ派の主張が明らかにされている。

五 要するに第四章で、《彼等》の本質を合理主義に求めて憎悪するスラヴ主義の基本的性格は反合理主義であると云う結論が一應引出されたものの、しかしスラヴ主義の本質が反合理主義・ロマン主義であることの積極的な論證はまだなされていない。そこで、著者は「神と人間」に關するスラヴ派の思想を觀察し、スラヴ派とギリシヤ正教及びドイツ理想主義哲學あるいは同時代のロマン主義者との關係を検討する。すなわちヘーゲル哲學は「西歐の精髓であるが、しかし當にそれ故にこそ西歐はヘーゲル哲學を超え得ないのである」と斷定するスラヴ派の知識と信仰との一致を強調した反理知主義の立場が明らかにされ、又ギリシヤ正教の影響を決定的に受けたスラヴ派の反理知主義的・反合理主義的性格は、彼等の人間界からも判然と讀取り得るようなロシヤ的なロマン主義であることが指摘されている。

六 最後の第六章において、スラヴ主義の思想的影響乃至意義に關する諸説が検討されている。まず、彼はスラヴ主義を基礎づけた A. Khomiakov・I. Kireevskii・K. Aksakov 以外の所謂スラヴ派は創造的・批判的能力を缺き、文字通り祖述者に終始したのに對して、スラヴ主義の正しい理解と批判とが思想傾向を異にする Herzen 及び Chernyshevskii によつてなされたと云う一見するとアロニカルなその事實と、Herzen 及び Chernyshevskii に「傲つた急進的・革命的なロシヤのインテリゲンチアが、スラヴ派の遺訓を輕蔑し無視したにも拘らず、その教義のあるものを通してスラヴ主義につながつてゐる」點を突き、特に人民派の革命理論がギリシヤ正教的性格を除去したスラヴ派の影響を最も鮮明に受けたと説く。次いで、スラヴ派の思想的意義に關する A. Pyrin・P. Mihukov・V. Soloviev・V. Smirnov・N. Rubinstein などの諸説に批判を加えつつ自説を指摘し、以下に引用するような記述をもつて彼は筆を描いている。すなわち「スラヴ主義はロシヤ文化史上重要な地位を占めている。古代的な排他的民族感情・排外思想・ギリシヤ正教の因襲・ドイツ理想哲學に對する渴仰・ロシヤの歴史的必要性を圖示化しようとする初めての意圖、こうした要素がスラヴ主義の諸々の背景をなした。スラヴ派のイデオロギーは非常に多くの異つたそして時には矛盾すらある教義から組成され、その影響は黒百人組から汎スラヴ派にまで及んだ。要するに、スラヴ主義はロシヤのロマン主義とロシヤの民族主義とを表現したのであり、就中、文化史の基底を構成する人間生活と思想の基本的問題の幾つかを探究したのである」と。

以上、リヤサノフスキイ著「スラヴ派の教説に現れたロシヤと西歐」についての外貌を記してみたが、「スラヴ派のイデオロギー」の本質究明を主題とした研究に際して著者の設定した問題點は、極めて獨創的なものであり興味深いものであると思う。なお又、周到に配慮された素材に基づく實證的な研究態度と非常に論理的な思考の展開は十分優れたものと云い得よう。しかし本書について特に氣付いた點をこの機會に指摘してみると、それは、スラヴ主義とドイツ理想主義哲學との、あるいはギリシヤ正教との關係がはつきりと畫き出されていないことである。著者の云う「ロシヤ的なロマン主義」の特殊性が本書において十分明らかにされたとは思えない。要するに、スラヴ派が《我々》と《彼等》をいかに理解していたかの問題に置いたと同様の力點を、《我々》と《彼等》に關するスラヴ派の主張乃至教説の内容に西歐又はギリシヤ正教の思想的影響がいかに反映されているかの問題にも置いて、「スラヴ派のイデオロギー」の本質を著者が追及しなかつたことに、前述したような物足りなさを感じさせる原因が潜んでいるのではなからうか。

(中澤精次郎)